みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

現代における感覚とマテリアリティの呪術論に向けて：共同研究：呪術的実践= 知の現代的位相：他の諸実践= 知との関係性に着目して

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-02-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 川田, 牧人
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008691

PROJECT

現代における感覚とマテリアリティの呪術論に向けて

文
川田牧人

共同研究 ● 呪術的実践 = 知の現代的位相──他の諸実践 = 知との関係性に着目して（2014-2017 年度）

現代世界において呪術を考えることの意味

本共同研究の初発の問題意識は、現代世界において、呪術的実践 = 知は隣接する他の諸実践 = 知（科学、医療、宗教、教育など）といかなる関係にたつか、また触知性や物質性など、身体や感覚が関わる領域に対して、呪術的実践 = 知の側面からいかに光をあてることができるか、というものであった。そしてこれを掘り下げるために、「信じる・知る・行なう・感じる」という 4 つの動詞を手がかりにして、呪術的実践の現場で行なわれていること、当事者によって経験されていることの実態を捉えようというねらいがあった。

これまで、「人類学者にとっては、『呪術』は、なしで済ませうる概念と比較的切り捨てやすいのではないか」（藤原 2002: 139）といった指摘がなされることもあった。それは、人類学研究のフィールドで「宗教」と「呪術」の異同を議論することはあまり意味がないことや、文化相対主義の議論以降は「科学」と「呪術」の違いは技術の多様性として捉えられることを根拠にした指摘であった。本共同研究に対しても、「呪術」を直接の主題とするよりもより現代的なキーワードにパラフレーズしたほうが考えやすいのではないか、あるいはより端的に、「呪術」は人類学的にはすでに死語なのではないか、といった直接間接のきびしい声が寄せられることもないではなかった。それに対し、本共同研究では以下の立場から研究を進めていった。

まず、現代世界における複合的な知識実践（研究課題名にある「諸実践 = 知」という言葉を、本稿ではこの語に言い換えて使用する）の様態のなかで、呪術の個別性（特殊性）と共通性（一般性）とは何かを明らかにすることをめざした。現代世界においても呪術がそれらの知識実践に吸収されず、むしろ独自の存在感を失わずにいるのは、それらでは代替できない何らかの根源的な意義があるからなのか、あるとしたらそれは何か、といったトピックが研究会でしばしば議論の俎上に載せられた所以である。そしてもう 1 点、知識や観念のみに偏るのでなく、感覚や行為の側面をも照射しうるような、当事者にとっての呪術の描き方が検討された。つまり呪術というとっかかりから、人が出来事を感知したりその出来事に参入していったりする感覚的行為的ポテンシャルについて考えることができるのではないかという見通しのもと、共同研究が進められていった。

呪術の感覚的経験

共同研究員による研究会発表は昨年度で一巡したため、最終年度はそれまでに提起された呪術の現代性や感覚経験としての呪術といった論点をさらに深めるため、2 名を特別講師として迎えた。そのひとり村津蘭（京都大学）は、「妖術師のリアリティの生成―ベナンの新宗教を事例として」と題して、ベナン共和国における新宗教「イエス・キリストのカトリック教会」（以下、教団 J）のケースをとりあげた。この教団 J はエクソシズムを中核とするキリスト教系新宗教であり、在来信仰ヴォドゥンを「悪魔」「妖術師」としてその営みを激しく攻撃する。このような攻撃がじっさいに死者を出すほどまでに過熱するのはなぜなのか。発表では大規模集会やミサ、祈禱会などの場面に着目し、視覚に訴えかけるようなカトリック教会のマテリアルな形象、あるいは声色やトーン、話し方などを変えて「神の声」を演出するなどの聴覚的訴えかけなど、妖術師や悪魔との関係がさまざまな感覚的手段を介して身体レベルで受容されていくことが指摘された。信徒一人一人にとっては、在来信仰は「悪の象徴」として一律には捉えられず、モノや感覚を媒介して妖術師との関係性が個別につくられるがゆえに、ときに死者を出すほどの激烈なリアリティをともなうのである。人と妖術の錯綜したネットワークを定型化された表象としてではなく、そのままの状態で、「可能な不定」として捉えることが必要だと村津は主張する。

もうひとり津村文彦（名城大学）による「東北タイにおける呪術・精霊と感覚」と題する発表は、呪術はいかにして（当事者にとって）リアリティあるものとなるのかという本研究全体の問いに対して、感覚や主観的な経験に着目して、これまで発表者が調査してきたタイ東北部における諸実践を再検討するものであった。呪文や水を吹きかけることによる呪術では身体の表面への接触感覚が身体の内部と直結しており、呪術の効果と感覚的側面の関係が確認できる。薬草師による瀉血では、血を除去するという主観的身体的経験を言語化する過程が意味をもつ。また悪魔払いや怪談などの反応としての所作や身体的反応などの感覚的経験も、言語を通して社会的に共有され、呪術のリアリティを生むのである。感覚的経験は個人の内部に知覚的にとりこまれる側面と、言語を通して社会化され個人の外部へ拡張される側面をもっており、この両者を捉えうることが、感覚的次元に着目する意義である。

ワイクルー儀礼で、呪師が信者に仮面をかぶせて聖なる力を再充填する（2017 年 5 月、タイ・コーンケーン県、津村文彦撮影）。

このふたつの発表はいずれも、呪術の感覚的経験に着目することによって、出来事の主知主義的理解のおよばない側面にも光をあてうることを示しており、これまでの研究会のいくつもの発表でも焦点化されてきたことと重なる。近年の呪術論は、

「イエス・キリストのカトリック教会」の大規模集会で「救い」（délivrance）に並ぶ人々（左写真）と、その「救い」の様子（右写真）（ともに 2015 年 11 月 14 日、ベナン共和国・バナメー、村津蘭撮影）。

高度に合理化された科学主義・官僚主義とスピリチュアルやオカルト現象などの浸透が同時並行して起こる現代世界の対極的なあり方から、合理／非合理の二分法にもとづいて呪術を捉える見方に修正を求めてきた。そもそも合理／非合理の基準は客観的で中立的なものというより、可変的で多義的なものであり、日常生活においてその行ないや考えが合理的かどうかを判断できない状況や、あるいはその問いをとりあえず棚あげして出来事を進行させていく場面も多々起こりえる。呪術が合理「外」（arational）なものとしてたち現れるのはそのような場面であり、想像力・直感・仮想性・幻視性など合理性のみでは捉えきれない要因を見いだすことも、現代世界における呪術論においては必要であることが指摘されている（Steffen, Jöhncke, and Raahauge 2015）。

方向性としてのマテリアリティ

さて、3 年半続いた共同研究も本年度が最終年度であるので、そろそろ出口を見定めるべき時期である。現在考えられる議論の柱はふたつある。ひとつは呪術の合理「外」性をつきつめていくと、上述のとおり、さまざまな知識実践が複合的に作用する現代世界の生活環境における未決定性の技法としての呪術の特性が浮かび上がってくるという点である。呪術は何かを決定的に判断したり理性の枠組みに定型的に囲い込んだりするのではないあり方ゆえに、他の知識実践との代替を拒み続けているのである。

もう 1 点は、呪術の感覚的経験と呼応するマテリアリティを追究する方向性であり、これについてはすでに本誌で本共同研究員の白川千尋（大阪大学）も紹介している（白川 2016）。超越的存在に対する抽象的思弁性をともなう宗教理解に対して、可視性や身体性を通して宗教理解に向かうアプローチである物質宗教論は近年さかんになってきており、呪術研究に限ってみてもまさに「呪術のマテリアリティ」そのものをタイトルとする論集が刊行されたりしている（Houlbrook and Armitage 2015）。考古学者を中心にしたこの論集では「マテリアリティ」という語を多義的に用いているが、一見して呪術とはコントラストをなす現世的、非精神的側面がむしろ呪術の理解を深めるという立場は、物質宗教論にも通じるところがある。

ただし、本研究で感覚を通したマテリアリティが呪術の理解を深めると考えるのは、具象から抽象へという単線よりもう少し入り組んだ経路を想定するからである。目で見える、手で触れるといったマテリアリティの世界は、われわれの理解に確実性を与えるのみではない。じっさいに病因となる物質が体内から取り出されたり、治療者の手の震えや体温が伝わってくるからこそ、かえってその施術がそら恐ろしかったり胡散臭かったりする感情をともなって、「神秘的な術」であるという認識が増幅されることもある。つまり感覚的経験を生みだすマテリアリティの世界は、呪術を確かなわざだと請け合ういっぽうで、いっそう不可思議な術としての反応も引き起こすというアンビヴァレントな認識の素地となっているのではなかろうか。先に紹介した 2 人の特別講師の発表では、いずれも不定性や不確実性について言及されていた。また共同研究員のひとり飯田淳子（川崎医療福祉大学）は次のように書いている。「不確定性は呪術の感覚的経験につきものといってもよいだろう。…しかしすべてが不確定なのではなく、知覚可能な面をもつからこそ、呪術は不確定な面を含めてリアリティをもつのではないだろうか」（飯田 2012: 199）。

感覚的経験が身体次元に生じることを考えると、感覚とマテリアリティを主体と客体のように二分法的に捉えるよりも、「物質としての身体に具わった感覚を介しての物質世界の物質との関わり」（古谷 2017: 19）といった視点をとりいれることも重要であろう。その意味では、肉体としての実物性（corporeality）というキーワードも、本共同研究の着地点には見えてくるかもしれない。

【参考文献】

藤原聖子 2002「『呪術』と『合理性』再考──前世紀転換期における〈宗教・呪術・科学〉三分法の成立」『思想』934: 120-141。

古谷嘉章 2017「プロローグ　物質性を人類学する」古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋編『「物質性」の人類学──世界は物質の流れの中にある』東京：同成社。

Houlbrook, Ceri and Natalie Armitage (eds.) 2015 *The Materiality of Magic: An Artefactual Investigation into Ritual Practices and Popular Beliefs*. Oxford: Oxbow Books.

飯田淳子 2012「不可視なものとの接触──北タイ農村における患いと治療」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』京都：人文書院。

白川千尋 2016「重なりあう呪術と科学」『民博通信』156: 12-13。

Steffen, Vibeke , Steffen Jöhncke, and Kirsten Marie Raahauge (eds.) 2015 *Between Magic and Rationality: On the Limits of Reason in the Modern World*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press.

かわだ まきと

成城大学文芸学部教授。専門は文化人類学、宗教人類学、東南アジア民族誌。著書に『祈りと祀りの日常知──フィリピンビサヤ地方バンタヤン島民族誌』（九州大学出版会 2003 年）、編著に『呪術の人類学』（白川千尋共編 人文書院 2012 年）など。